

# 複製技術と日本語

## ——戦後の国字問題と事務に関する試論——

新 倉 貴 仁

はじめに

言語は、ナショナリズムを解明するにあたって中心的な主題である。ナショナリズムを近代的現象ととらえるアーネスト・ゲルナーは、読み書き能力としての言語の性格に注目し、教育を通じて教えられる言語が、それまで垂直的に分断されていた社会を水平的に統合し、産業社会における新しい労働形態を可能にすると論じる。他方、ゲルナーに対する批判的議論を展開するアンソニー・スミスにとって、言語はネーションとそれに先立つ文化的共同体の紐帯を織りなすものである。

実際、両者の議論はそれぞれに首肯できる。「日本語」を例にとってみても、明治政府の教育制度と出版市場の成立によって、俗語や方言とは異なる標準語としての「日本語」が確立する。他方で、万葉集や古今和歌集、源氏物語、平家物語など、さまざまな古典は「日本」という文化の重要な構成素となり、書かれたことと読まれることは「日本語」の実定性を支え、ネーションという想像の共同体を強化する。

しかし、このような「日本語」や「国語」の成立は、内なる抑圧や他者の排除をともなっている。1990年代、冷戦の終焉とグローバル化を背景に隆盛したナショナリズムの批判的研究が強調した点である。この時期、イ・ヨンスクの『「国語」という思想』(1996)、駒込武の『植民地帝国日本の文化統合』(1996)、安田敏朗の『帝国日本の言語編制』(1997)、長志珠絵の『近代日本と国語ナショナリズム』(1998)、小森陽一の『日本語の近代』(2000)といった言語とナショナリズムに関する優れた研究が出版された。これらの議論は、いずれも国語や日本語の相対性と構築性を描き出すものであり、同時期の国民国家論や総力戦論、

カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の議論と共振していた<sup>1)</sup>。

同時に、国語や日本語を主題としたこれらの議論のあいだには差異があることも確認したい。とりわけ、酒井直樹の『死産される日本語・日本人』(1996)は、透徹した理論的思考を通じて日本文化や日本語の構築性を論じる。しかし、日本語という表象が通時的な一貫性をもっていることを強調するゆえに、日本語をめぐるさまざまな歴史的な実践の抗争や折衝が抽象化されてしまう。それは具体的な歴史を探究する他の論者の著作との違いとなっている。

実際、言語とナショナリズムとの結びつきは容易な問題ではない。このことは、1990年代のナショナリズム論の多くが引用、参照していたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』のなかで、言語とナショナリズムの問題がきわめて微妙な関係にあることからもうかがえる<sup>2)</sup>。

本論文では、アンダーソンのナショナリズム論を手がかりとして、言語とナショナリズムの問題を、産業社会の特徴である大量生産技術、すなわち、複製技術との関連から解明する視点を得ることをめざす。言語は、社会に流通する情報としての側面をもち、その生産、流通、蓄積は産業を編成する技術の影響を受ける。このような議論の重要な先行研究として、2016年に出版された安田敏朗の『漢字廃止の思想史』をあげることができる。戦前からつづく国字問題やカナモジカイ(会)の運動は、大量生産技術の到来にともなう産業技術の変容に即して、言語の変更をうたえるものであった。特に注目すべきは、このような議論が、戦前だけでなく、戦後においても展開されていることである。本論文では、戦後の国字廃止論者の一人であった岩村清一に注目し、その議論がファイリング・システムという「事務」に関する問題意識と深く関係していたことを示す<sup>3)</sup>。これは、1969年に出版された梅棹忠夫の『知的生産の技術』が書かれた文脈を構成するものでもある。事務をめぐる「能率」の問題は、戦前から戦後まで連続する。そして、半世紀以上にわたる漢字廃止の思想の影響力を大幅にそいだのは、ディスプレイ上で表示される漢字の出現と、変換プログラム、ワードプロセッサの登場、それらを通じたオフィス・オートメーション(OA)の広がりであった。今からみれば、岩村ら戦後の国字廃止論の議論は時代錯誤的にみえるか

もしれない。だが、それは、今日の情報化社会を構成した重要な歴史的  
文脈であり、現代社会を解明するための重要な系譜の一つである。

## 1. 1990年代の言語ナショナリズム論

酒井直樹は、1996年に出版された『死産される日本語・日本人』の  
なかで、日本語、日本人といった基礎概念の構築性を、あざやかに描き  
出している。

酒井は、「近代においては、国民共同体、国民文化、国民語、社会、  
国民経済（さらに民族と人種を加えることができよう）といった統一  
体のそれぞれの輪郭が、たがいに重ね合わされ、相互に一致するかのよう  
に構想される」（酒井 [1996] 2015: 227）と述べ、ネーションが想像さ  
れた共同体であることを論じている。この想像の機制の分析に関して、  
酒井は、それが他者の否定や排除によって可能となっていることを強調  
する。

しかも、自己充足的な統一体としての国民共同体の形象は、国際  
社会における相互関係によって支えられており、自己の国民共同体  
はつねに他の国民共同体との比較と区別を媒介にしつつ構想される。  
たとえば、日本人であることの最も基本的な定義は、日本人でない  
中国人や西洋人ではない、という二重否定形をとる。（酒井 [1996]  
2015: 228）

自己の想像のためには、他者との比較と区別が必要である。その比較  
は、自分たちとは異なる他者ではない自分たち、といった入り組んだ構  
造をもつ。このような構造を、酒井は「対-形象化」という概念によっ  
て論じている。

他の「社会」や「文明」を均質で一枚岩的な他者として表象する  
ことに見合って、反照的に、対-形象化の図式を通じて、自国民、  
自民族、自人種を、均質で分割不可能な統一体として構想すること  
が可能になる。（酒井 [1996] 2015: 228）

国民共同体は「自己充足的な統一体」として想像されるのであるが、それは他者を「均質で一枚岩的」なものと表象し、それを否定すること（「中国人や西洋人ではない」）を通じて、仮構されるのである。酒井の議論は、共同体への想像力が常に他者の排除を前提とすることを鋭く指摘するものである。そして、このような共同体の意識は、近代における個人主義と双対的な関係にあり、互を必要とし、補いあう関係にある。

個人を分割不可能な実体 *individuum* と見る個人主義と、社会を分割不可能な個体 *individuum* とみる見方は、こうして、近代の基本原則となる。個人主義と国民全体主義はたがいに矛盾するどころか、論理的にたがいを必要とし、共犯関係にあるのである。（酒井 [1996] 2015: 230-1）

この議論にもとづき、酒井は単一民族神話を批判している。なぜなら、「日本語」「日本人」という概念の表象の機制を通じて、なかったものがあたかも過去にはあったかのように、そしてなかったものが現在には喪われたものとして、語られるからである。

18世紀の言説においては、日本語と日本語が普遍的に通用したはずの共同体の存在を古代に仮設することによって、日本語が生み出された。しかも、日本語と日本民族の存在は、古代には存在しても現在には存在しないもの、現在においてはすでに喪失されたもの、として仮設されなければならなかった。つまり、日本語の誕生は、日本語の死産としてのみ可能であったのである。（酒井 [1996] 2015: 244）

酒井の議論は、文化的本質主義や、「均質志向社会性 *homosociality*」（酒井 [1996] 2015: 269）への批判である一方で、近代そのものを解明するうえで、「近代が自ら抱え込んだ過剰、その雑種性」（酒井 [1996] 2015: 233）に注目することを目指すものである。このような視点は、同時期に進展していたポストコロニアル研究や差異の政治学の重要な理論的な支えとなった。

## 2. 『想像の共同体』における言語の位置

酒井直樹も参照し、また、1990年代におけるナショナリズム論の隆盛に強く影響を与えたのが、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の議論である。とりわけネーションという共同体や国民語が、均質で統一的なものとして想像されるという議論は、酒井の議論と重なる。だが、アンダーソンのナショナリズム論における言語の位置は、かなり入り組んでもいる。

たしかに、『想像の共同体』のなかで、言語は決定的に重要な要因であるかのように思われる。とりわけ、19世紀のヨーロッパにおけるナショナリズムの勃興を説明するにあたって、アンダーソンは次のように論じている。

シートンワトソンが見事に示しているように、19世紀は、ヨーロッパとその隣接周辺地域において、俗語の辞典編纂者、文法学者、言語学者、文学者の黄金時代だった。これら専門的知識人の精力的な活動は、1770年から1830年にかけての南北アメリカの状況とはまったく対照的に、19世紀ヨーロッパにおけるナショナリズムの形成に中心的役割を果たした。単一語辞典は、店から学校へ、オフィスから家へと携帯可能な（たとえときにかさばりすぎるにせよ）、各言語の印刷物宝典の龐大な総目録であった。二言語辞書は、言語のあいだのきたるべき平等主義を目に見えるかたちで示したものであり、政治的現実がいかなるものであれ、たとえばチェコ語・ドイツ語／ドイツ語・チェコ語辞典の表紙の内側では、一対の言語が共通の地位をもっていた。(Anderson 1991=1997: 125)

ここには19世紀に言語学をはじめとする知識人が、辞典、文法、言語学、文学などを作り上げていったこと、さらにはそれらの翻訳を通じて、複数のネーションのうちの一つであるという意識が広まっていることを示している。前節で論じた酒井直樹の議論は、このような文脈のなかで、「日本」および「日本語」の意識を形成していったものとして理解することもできるであろう。

だが、アンダーソンが南北アメリカのクレオール・ナショナリズムを、ナショナリズムの先駆としてとらえていることを考えると、言語の問題は簡単には国民意識の形成には結びついていかない<sup>4)</sup>。なぜなら、クレオール・ナショナリズムにおいて、植民地の住人は、宗主国と言語を共有していたからである。

まず第一に、ブラジルにせよ、アメリカ合衆国にせよ、あるいはスペインの元植民地にせよ、言語はこれらの国々をその本国から分化する要因ではなかった。アメリカ合衆国をふくめ、すべての国家はクレオール国家であり、それは、かれらが叛旗を翻した当の相手と言語、出自を共通にする人びとによって形成され指導された。実際、言語は、これら初期の国民解放闘争においては争点にすらならなかったのだった。(Anderson 1991=1997: 92)

アンダーソンがナショナリズムの先駆者と呼ぶ新大陸におけるナショナリズムは、英語、スペイン語、ポルトガル語と、宗主国と言語を共有していた。言語的差異が、独立や分離の要因ではなかったのである。

クレオール・ナショナリズムによって誕生した国々は、「世界の舞台に登場した最初の国民国家であり、それ故、必然的に、国民国家とは「どのようなものか」、その最初の現実的モデルを提供したばかりでなく、複数の国民国家が同時代的に誕生したことによって、比較のための実り多き地歩を提供している」。だが、同時に、それらの国家は、「特定の出版語の限定範囲」とびったり重なるものではない。クレオール・ナショナリズムは、現代における「出版語、国民意識、国民国家のあいだの連結の不連続」を説明するものなのである (Anderson 1991=1997: 87)。

たしかに言語（出版語）は、ナショナリズムの成立において重要な役割を演じる。だが、それがそのまま国民意識を創出したり、国民国家の領域を決めたりできるものではない。

ここでアンダーソンが言語を、「出版語」と限定していることに注目しよう。アンダーソンのナショナリズム論において言語はきわめて重要な位置を占めるが、それは「出版語」の成立ということに集中している。

ナショナリズムを発明したのは出版語である。決してある特定の

言語が本質としてナショナリズムを生み出すのではない。  
(Anderson 1991=1997: 211)

ゲーテンベルクの活版印刷術の発明とそれがもたらした出版資本主義は、聖なる言語としてのラテン語と、人びとが話す俗語とのあいだに、「出版語」という領域をひらき、ネーションの想像を可能にする。

このような活版印刷術とナショナリズム、言語との関係は、すでに1962年にマーシャル・マクルーハンが『ゲーテンベルクの銀河系』のなかで論じたものである。

印刷技術とともに、ヨーロッパは人間の長い歴史のなかで、消費を社会の原動力とする消費時代の最初の段階にさしかかったのだった。なぜなら、印刷はたんなる消費媒体であり商品であるにとどまらず、人間が自分のすべての経験、あらゆる活動を線形システムにもとづいて再組織してゆく営みを教示していたからだ。また印刷は人間に対し〔計画的に生産物を販売する〕市場 market を創り出し、国民軍を創設する方法も教えたのだった。なぜならば、印刷という熱い媒体によって、人間ははじめて自分が話している民族語を文字のかたちで「視る」ことが可能になったからであり、かつそうした言語が話されている地域という観点から、国民的統合や国力が頭に描かれはじめたからである。(McLuhan 1962=1986: 212-3)

ここにはたしかに技術決定論ともいえるような口調で、民族語（出版語）を「視る」という経験を通じた国民意識の醸成が論じられている。だが、マクルーハンがここで、「消費媒体」、「商品」、「市場」という言葉を用いていることに注目しよう。アンダーソンの「出版資本主義」という概念は、この延長線上でとらえるべきである。それは単に個々の出版業者が営利を目的としているということに言及するだけではない。「出版資本主義」とは、「プリント」という実践を通じて無数の商品を複製していくことを原理として、収益をあげていくことを特徴とする資本主義であり、それを通じて社会を編成するものである。

とするならば、ナショナリズムの議論は、統一的で均質的な共同体の想像や表象という次元だけを問題にするのでは、限定的な議論にしか

らない。より重要なことは、無数の商品を複製するような、産業と資本との関連において、言語あるいは出版語がどのように編成されていくのかを探ることである。

### 3. 国字問題——産業と言語

言語を、国民国家の文化装置という理解を超えて、産業技術との連関から考えていく手がかりが、「国語・国字問題」と呼ばれるものにある。酒井直樹らが論じるように、近代化において、日本語は均質な共同体を構成する。だが、同時に、近代化において、日本語は、その境界そのものが揺るがされ、時にはその表記の体系そのもののラディカルな変革をつきつけられていた。

たとえば、成城学園の創立者でもある澤柳政太郎は、文部省普通学務局長として、1904年の『教育界』第三巻第四号に「国民の一大問題」という文章を寄せている<sup>5)</sup>。

余は今此処に国語改良の問題は国民の最大最急の問題であると云うことを陳べて国民の多数が此の問題に向って相当の考を費さんことを希望するのである。(澤柳 [1904] 1950: 198)

澤柳が主張することは、漢字を廃止して、仮名もしくはローマ字を用いること、さらには言文一致を実行することである。

一ツは吾が国の文字を改め漢字を廃して仮名若しくは羅馬字を用ゆべしという事と、尚ほ一ツは言文一致を実行すると云う二ツのことであると思ふ。(澤柳 [1904] 1950: 198)

澤柳の漢字廃止の論拠は、第一に、漢字の習得に膨大な時間と手間がかかるという理由である。そして、第二に、言語そのものが「思想の交通機関」としての役割をもつゆえに、それを改良し、利用することが必要であるというものである。

このような漢字廃止をめぐる議論は、日本の近代化の中で繰り返されてきたものであった。紀田順一郎は『日本語大博物館』の中で、日本語



と機械化における主題の一つとして、漢字廃止論を紹介している（紀田 2001）。さらに、2016 年に出版された安田敏朗による『漢字廃止の思想史』は、その歴史をカナモジカイの活動から詳細に論じている。

1920 年 11 月 1 日に、山下芳太郎が仮名文字協会を設立し、神戸に事務局を置いた（安田 2016: 95）。山下は、1920 年に『国字改良論』を発表し、第一次大戦後の世界情勢をふまえ国力の増強が必要であることを論じる。その際に大きな障害とみなされていたものは、資源不足という領土や植民地に関する問題に加え、日本社会が「文明の大利器たる印字器 typewriter や「ライノタイプ」などを十分に使用し得ざる事」であった（安田 2016: 99）。

第一次大戦後の競争のためには、産業の合理化、能率化が必要である。その産業の合理化や能率化のためには、事務の能率化が必要となる。だが、日本語の表記は、タイプライターや新しい印刷機器を利用するためには、十分ではない（安田 2016: 100-1）。もちろん当時、杉本京太が 1915 年に発明した邦文タイプライターがあった。だが、邦文タイプライターは清書のために用いられるものであり、文書の産出の速度をあげるものではない。英語のタイプライターと同様の速度で、英語ではない表記で文書を生産できるタイプライターがなくてはならない。

そうしてカナモジカイは、カナモジ・タイプライターの発明と普及、機関紙『カナノヒカリ』による言論活動などを展開していく。その活動は、アジア・太平洋戦争期になっても継続する。カナモジカイの主張は、高度国防国家の建設のための「統制」に適したものであった。実際、陸軍は漢字制限を行い、1942 年には標準漢字表をめぐって多くの議論が交わされることになる（安田 2016: 171-2）。

ここで強調したいことは次の二つである。一つは、1990 年代における日本語についての批判的な歴史研究が日本語の構築を強調する一方で、日本語は近代の歴史のなかで大きく揺らいでいたことである。特にそれは国民国家論が光をあててきたような、国民統合という問題だけでなく、産業化という側面からの問題であった。日本語の機械化自体が難しいとき、日本語の表記方法そのものの大幅な改良が目指される。先述した戦時期の標準漢字表の制定を通じて、日本語の表記方法は戦後、それまでの表記方法から大きく変わることになる。

そしてもう一つには、安田が最後の章で論じているように、この動き

は戦後のある時期まで非常に大きな力をもったということである。安田は『マネジメント』と『事務と経営』という二つの戦後の出版物のなかで漢字廃止の議論が展開していたことを指摘している（安田 2016: 421-422）。また、1960年に梅棹忠夫が『中央公論』に執筆した「事務革命」の論文にも論及している（安田 2016: 33-34; 429-431）。そこには、国字の問題が、事務と能率という主題に絡まり合いながら独自に展開していく歴史が示唆されている。

以下では、安田の議論を補完すべく、戦後の国字をめぐる動きを探求する。第一に、国字廃止と事務革命の議論が、梅棹忠夫のベストセラー『知的生産の技術』に接続していることを示す。第二に、戦後に国字改革と事務革命を主唱した人物として、岩村清一に注目し、ファイリング・システムという問題を示す。国字と情報という二つのものを結びつける「事務の機械化」という主題は、私たちの社会の「情報化」と、ナショナリズムという現象を考えるうえで見過ごされていた文脈であると考えられるであろう。

#### 4. 事務の機械化と日本語——梅棹忠夫をめぐる<sup>6)</sup>

1965年、梅棹忠夫は、岩波書店の雑誌『図書』で連載「知的生産の技術について」を開始し、6回の記事を書く。1968年10月から「続・知的生産の技術について」を連載し、5回の記事が書かれる。それがまとめられ、1969年7月に、『知的生産の技術』として発行される。その目次は以下の通りである。

はじめに／1 発見の手帳／2 ノートからカードへ／3 カードとそのつかいかた／4 きりぬきと規格化／5 整理と事務／6 読書／7 ペンからタイプライターへ／8 手紙／9 日記と記録／10 原稿／11 文章／おわりに

データの収集から整理、表現までをカバーしたこの本は、優れた調査・研究法入門書として、現在まで増刷の続くベストセラーとなっている。だが、その内容には、1960年代に執筆され、出版されたことの歴史性が刻印されている。このことをもっとも如実に表しているのが、

7章の「ペンからタイプライターへ」である。7章の見出しは、以下の通りである。

日本語を「かく」／筆墨評論／鉛筆から万年筆へ／かき文字の美学と倫理学／タイプライターのつかいはじめ／手がきをはなれて／ローマ字論の伝統／ことばえらびとわかちがき／文字革命のころみ／きえた新字論／ローマ字からカナモジへ／カナモジ論の系譜／カナモジ・タイプライター／カナモジへの抵抗／ひらがなだけでかく／ひらがなタイプライター／改良すべき問題点

ここには、タイプライター、特にカナモジ・タイプライターについての内容が含まれている。「知的生産」が、「情報」を「ひとにわたるかたちで提出すること」と定義されるように（梅棹 1969: 9）、『知的生産の技術』は、情報の収集、整理、表現を扱う日本における情報学の古典である。くわえて、この書は、書字の技術を論じている点で、日本におけるメディア論の古典と考えるべきである。そして、重要なことは、梅棹がこの文章を著わしていた1960年代には、事務の諸実践の変革が進行しつつあったことである。

梅棹は『知的生産の技術』に先立ち、事務に関する文章を発表している。そのうちのいくつかは、のちに『日本語と事務革命』として単行本化されている。たとえば、1960年に『中央公論』に連載していた「日本探検」の第5回として執筆された「事務革命」であり、1961年に講談社の講座「現代の話し方と文章」の第5巻『実務の効果的な文章の書き方』のために執筆された「文書革命の現実と将来」などである。これらの一連の文章は、それまでの国語学や国文学とは異なり、カナモジ・タイプライターやファイリング・システムなどへの参照を通じて、国語という主題を「日常言語の技術」として考えるものであった。

1969年に行った講演にもとづく「現代における国語と国語教育」という文章のなかで、梅棹は日本語が機械化に向いていないことを指摘する。戦前から続くカナモジカイの主張に沿ったものである。

現代文明における日本語の大問題のひとつは、この言語を機械にのせることがひじょうにむつかしいという点であります。文書をか

くにしても、ローマ字国ではやくからタイプライターが発達していますから、きわめてかんたんです。印刷技術にしても、日本のように何千という種類の活字を相手にしなければならない国とは、くらべものになりません。大量の文章を作成し、その情報を処理しなければならないという時代に、いま、われわれの社会はさしかかっています。そういう実際的な要求に対して、現在の日本語ははなはだ不都合がおおいのであります。(梅棹 [1969] 1992: 164)

梅棹のこのような議論は、1960年代に進んでいた事務の機械化という、ビジネスの構造やオフィス空間の変容を背景としたものであった。

また、機械化をすすめることによって、文書の規格化はいやでもすすむ。ファイリング・システムの採用によって、書類が担当者の私物と化するのをふせぐことができる。いわゆる「生き字びき」を駆逐し、経験の共有化をはかることができる。こういうことはいづれも、単に、ある一定量の仕事がまえよりも短時間にできるようになった、という意味での能率の問題ではないことはあきらかである。(梅棹 [1961] 2015: 98)

知識や情報を個人から引き離し、文書によって共有し、組織のものとする。コミュニケーションの流れを定め、それを円滑にするために規格化を目指すこと。これらは、ジョアンナ・イエイツが19世紀後半から20世紀前半にかけてのアメリカの大企業において生じたと論ずる、「コミュニケーションを通じた制御」の事例であるといえる<sup>7)</sup>。

以下、本論文では、このような「コミュニケーションを通じた制御」が、日本社会においても、アジア・太平洋戦争の敗北とその後の復興の中で、独特の意味をもち、強い勢いをもってひろがっていったことを考察していく。

## 5. 事務と国字問題——岩村清一をめぐる

梅棹の議論は戦後の事務革命を文脈としながら、事務の効率化のために書字の改良、カナモジ・タイプライターの使用を訴える議論であった。

それは、「事務革命」と戦前からの国字問題が接続することを示す。このとき岩村清一という人物が浮上する。岩村は、戦前、海軍中將として艦政本部長を務めた人物である<sup>8)</sup>。戦後直後から事務能率をうったえ、日本生産性本部や日本事務能率協会に深く関わる。

そして、1956年に『第二次産業革命と国字問題』という本を出版している。この本は、戦後に国字問題が継続していたこと、さらにはそれがより強く求められる理由が登場してきたことを示している。岩村は、ほかにも『日本とイギリスの民主政治』（1953）、『日本生産性の基盤』（1955）という単著を著している。これら一連の議論の原型は、すでに、戦後直後の1946年に岩村が『ダイヤモンド』に発表した「国家事務能率増進の具体案」という文章にあらわれている。

#### 5. 1. 「国家事務能率増進の具体案」（1946）

敗戦を振り返り、岩村は、その根底に「日本人の物の考え方が、論理的でない」こと、「日本人の物の考え方が科学的でない」ことにあると論じる。敗戦に関してこのような論理性や科学性の欠如を指摘する言説は、それほど珍しいものではない。だが、注目すべきは、岩村が用いる「科学的」ということばである。岩村は、「科学的」であることを、文書、資料、知識といった問題にかかわるものとして定義する。

事物を科学的に観察するには、過去及現在に亘って、出来得る限り多くの資料を集むることを必要とする。此等の資料を整理、整頓し、何人にも容易に使用し得る様になし置くことは、広く一般の知識及び経験を有効に利用する所以である。これにより、事物を科学的に考察し、新しいものを創造発展せしむることが出来る。（岩村1946: 20）

科学的観察は、資料の収集、整理、整頓を通じて可能になる。さらにそのような資料体は、限られた人や特殊な技術をもつ人にだけ使用可能なのではなく、誰でも使用可能にならなければならない。そうして、知識や経験が活用され、科学的考察や創造が可能になると論じる。

このように科学を定義したうえ、岩村は具体的な制度や実践に問題をしばっていく。第一に、「図書館」と「記録庫」が整備されていない。

第二に、「メモ」が属人化してしまい、組織的整理が欠如している。第三に、行政や事務の文書は体系だって整理されず、数年して所在がわからなくなってしまう。そして、第四に、統計および計数についての考え方が貧弱である。

もし精確な資料や統計があれば、科学的な比較や歴史的な検討、立証が可能になり、ひいては複雑化する社会のなかで、「民主政治、議会政治を円滑に運用」することが可能になる。

このような議論を展開する背景には、岩村の戦前の経験があった。1930年のロンドンでの国際会議が終わると、三ヶ月もの長い会議記録が一週間以内に整理、合本され、印刷配布された。それに対して、日本側はタイプライターを十分に使用することができなかった。

これらの情報の問題を引き起こしていることが、国字・漢字の問題である。タイプライターを十分に使用できないため、複写をつくるのに時間がかかり、配布が困難となり、文書自体が消滅してしまう可能性がある。ここに制度の組織運用にたいする知識と理解の欠如が加わる。

とはいえ戦前においてタイプライターがまったく使われていなかったわけではない。むしろ、不十分であるとしてもタイプライターは戦前の行政における文書の生産の重要なインフラストラクチャーとなっていた。岩村は、戦争末期に空襲が激しくなり、交通網が十分に機能しなくなると、女性のタイピストが出勤できなくなり、事務が停滞したことを回想している。それは、「国字の困難、「タイプライター」使用の不便化、本組織運用上の一大障害なるのみならず、如何に国家の能率に影響せるかの実例」である（岩村 1946: 22）。

そして岩村は、次のように提案して、この文書を締めくくっている。すなわち、「用紙を規格化し、その種類を、出来得る限り減少」させなければならない。また、日本語の国字は、分類索引の作成をむずかしくするばかりでなく、タイプライターの「能率的」な使用を困難にする。資料と統計の整理・整頓のためには、索引部分だけでもローマ字を使用し、全体の体系および組織を明瞭にしなければならない。文書の表記はみな左から右へと横書きにしなければならない。最後に、このような文書の整理の考えをひろく普及させ、実施することへのひろい同意を得なければならない。

本問題は、国家国民の能率、文化の向上、民主政治の実施上にも、重大なる影響あり、且つ国語問題、用紙の規格化、統計学的觀念の普及を要し、因襲を打破して、断行するのてなければ、実現は不可能である。従つて此の革新の時に決行せねば将来また、之を行う好機を得ることは殆ど出来ない。我国は未来、永恒、能率的国家として浮かび上がることは出来なくなるのを憂ふる次第である。(岩村 1946: 22)。

敗戦を経て、その原因が文書の整理の不十分に見いだされる。そして、国字をはじめとした伝統の改革を通じてようやく「能率的国家」となることができると岩村は論じる。

## 5. 2. 『第二次産業革命と国字問題』(1956)

以上の議論は、1956年に岩村が出版した単著『第二次産業革命と国字問題』においてもくりかえされるものである。ここではさらに、能率化、生産性の向上のために、「国民の文化活動の基盤となる文字」をアルファベットに変えることが提起されている。

第二次産業革命、敗戦により課せられた新しい条件等戦後の苛烈な環境の下に日本民族が生存と繁栄とを完うするには科学文化を發達せしめ、国民の社会活動を一層能率化し、生産性を向上せしめる他に選ぶべき道はないのであって、これがためには国民の文化活動の基盤となる文字を表音文字である Alphabet で表わし、古来日本語の根幹に等しい働きをしていた、漢字を廃止する……(岩村 1956: 71)

敗戦直後の文章と異なるのは、第二次大戦後のより具体的な科学技術の發展が言及されていることである。すなわち、「超音速飛行機」、「電波通信」、「Mass Communication」、「Teletype」、「電子計算」である。これらの技術を用いて、それまでとは比べ物にならない「超高速」の活動が生じつつある。岩村はこれを「第二次産業革命」と呼ぶ。このような巨大な環境の変容のなかで、「国語の音文字化」はすみやかにすすめていかなければならない(岩村 1956: 47)。

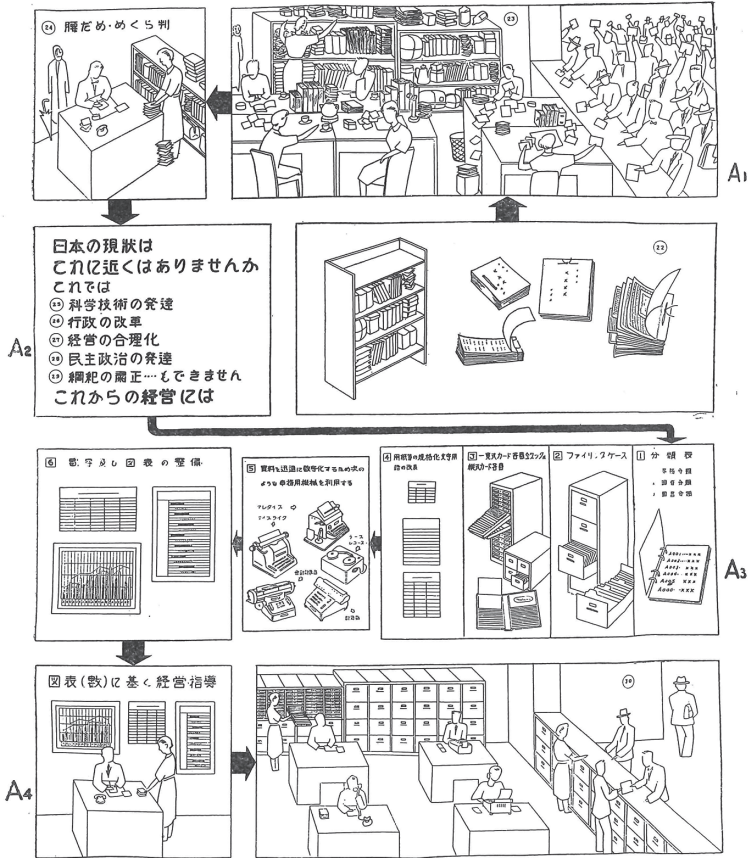


図1 合理化能率化の基礎条件

そして、そのような国字のアルファベット化とあわせて岩村が提起するのは、ファイリング・システムの実践である。それは、科学的、合理的であるために必要な実証性を基礎づけるものである。そして、そのような資料にもとづくことが、科学的、合理的となり、能率的な活動を可能とする。実証のために必要な資料は、豊かに収集され、整理整頓され、すぐに使用可能な状態にならなければならない。このような一連の文書の処理が、「科学的文書資料の整理法 Filing system」である（岩村 1956: 16）。



第二次産業革命は、電子計算機やオートメーションを特徴とするものであるが、それらを実現する基礎となるのが文書資料の整理なのである(図1)。岩村はここで、ファイリング・システムをサイバネティクスに結びつけ、まず基礎的な試みとしてそれを完成することを提起する。

Filing system (ファイリング・システム) は人工頭脳(Cybernetics)の一種と称し得る仕組であって、やたらに物を記憶する必要もなく機械と組織化により人の頭脳と同じ働きをする。日本では一足飛びにCybernetics (サイバネティクス) をやる前に、先ず Filing system (ファイリング・システム) を完成することが必要なのである。そうでなければ高価なる電子計算機を利用する Cybernetics (サイバネティクス) も完全に利用することは出来ない。(岩村 1956: 16-7)

ここでの岩村のサイバネティクスの理解は、「人工頭脳」という訳語や、電子計算機の利用が示すように、ひろく情報学と呼び得るものを指していると理解できるであろう。そして、岩村は、そのような情報学の十全なる発達のためには、ファイリング・システムを通じた文書、書類、知識、データの整理が必要であると論じる。

### 5. 3 事務とファイリング・システム

岩村清一は『事務と能率』の創刊時からの寄稿者の一人であった。1949年の『事務と経営』の創刊号には、「行政事務能率改善の具体策——まづファイリング・システムの思想を獲得せよ」を発表する。その後も、第1巻3・4号には「文字・能率・文学」を、そして、第1巻5号には「事務能率の影響に関する諸要素」を寄稿している。

『事務と経営』の創刊号には、岩村以外に、上野陽一、川口輝武、三沢仁といった人物が寄稿し、フォルダ、ガイド、索引、フォーム(帳票)など、具体的な事務の実践法を紹介している。岩村の戦後における「国字」をめぐる議論は、ファイリング・システムを中心とした事務能率の改善という主題のなかで展開したものであった。以来、『事務と経営』は1992年に至るまで、さまざまな事務機械を紹介しつつ、事務能率の改善を訴える媒体となった。

以上が、1969年の梅棹忠夫の『知的生産の技術』での見出しの背景である。梅棹は、同書の第五章「整理と事務」のなかで「ファイリング・システム」について、みずからの出会いの経験を交えながら、紹介、探究している。一方で、家庭での書類整理として「家庭の事務革命」を唱え、他方で、「ビジネスの世界」すなわち、企業経営に学ぶことを提唱する。現在、PCや複写機は家庭へとひろがり、日常的にスプレッドシートで生活を記録し、管理する営みが繰り返される。それどころか日常的な決済は自動化されて記録される。ファイリング・システムは、私たちの生活となっている情報社会の一つの源流である。

## 6. おわりに

本論文は言語とナショナリズムについて、産業技術という視点から考察することを提起してきた。日本語や日本人という統一体を批判する議論は、その相対性や歴史性を指摘する意図にもかかわらず、通時的に一貫する構造を指摘するために、構築された文脈となる社会への議論を閉ざしてしまう。だが、国字問題が示すように、「日本語」は安定的な制度ではなく、むしろ産業技術との相関のなかで、揺らぎをもって存立していた。

日本語や国字の問題は、タイプライターやファイリング・システムを媒介として、事務という問題に結びつく。本論文でみてきたように、戦後の事務革命の痕跡は、梅棹忠夫の『知的生産の技術』に刻まれている。それは大量生産技術がもたらすスピードや能率への探求が、日本語や国語を変容させる情景を垣間見せる。だが、1970年代にワープロが登場し、デスクトップパブリッシングが印刷産業自体の構造を変容させ、PCがそれぞれの書字の技術として普及する。もはや国字廃止の議論はその実定性を喪うように思えるが、同時にそれは15世紀から続いてきた活版印刷術による書物の生産という事態を大きく変えるできごととも考えられる。

くわえて、それは、本論文のタイトルとした「複製技術」の変容の情景でもある。この語は、ベンヤミンの著名な論文の邦題を念頭においた表現であるが、英語では「機械的再生産」と訳されていることを大事にしたい。ベンヤミンが執筆していた時期の複製は、刻印による転写や、

部品の規格化・標準化を通じた生産に由来するものであった。1930年代のアメリカ文化が「マシーン・エイジ」と呼ばれるように、「機械」は同時期の象徴的概念である。そして、岩村も、梅棹も、書字の問題を「機械」の問題として考えていた。だが、戦後の情報化は、書字を0と1の差異に転換していく。このような新しい複製技術（デジタルによる複製）はいかなる社会的関係をもたらすのであろうか。

このような課題の一つとして、事務機械や事務の言説の変容を追跡していきたい。これは、本論文でも言及したジョアンナ・イエイツの仕事や、オフィスとファイリングをめぐるクレイグ・ロバートソンの研究、ドイツ語圏のホルネリア・フィスマンの研究などとも接続する。また、リサ・ギテルマンが「ドキュメントの歴史」として示すプロジェクトにもかかわるものである<sup>9)</sup>。

同時に、1990年代のナショナリズム論は、事務機械の問題との関わりから、あらためてその可能性が考察される必要がある<sup>10)</sup>。安田敏朗は、2006年の著作のなかで国語、標準語の問題を、アンダーソンが「配電システム」という比喩で呼んだ国家 state の機構に結びつけている<sup>11)</sup>。事務の問題は、官僚機構の問題に結びつく。それは「コミュニケーションを通じた制御」として、産業技術と市場の発達をなかで求められるものであった。アンダーソンの議論は、ネーションとステートを峻別することを一つの特徴としていた。このことを踏まえたうえで、出版市場に由来する想像力と、書物の整理に由来する技術との結びつきを改めて考える必要があるであろう<sup>12)</sup>。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費 23K01778 の助成を受けたものである。また、本論の基礎となる報告は、2017年11月18日成城学園創立100周年記念事業「日本語を「表現する」／「考える」——日本語というメディア」で発表した。村瀬鋼先生、竹内史郎先生、標葉隆馬先生をはじめとして当日参加された方々には貴重なコメントをいただいた。

## 註

- 1) 新倉 (2022) を参照。総力戦論と国民概念の関係については新倉 (2023b) を参照。本論文は、1990年代のナショナリズム論を再考するプロジェク

- トの一部である。
- 2) アンダーソンのナショナリズム論については、新倉 (2016) を参照。
  - 3) 文書整理法については、坂口 (2016)、渡邊 (2021) を参照。特に、坂口は岩村清一の戦後のファイリング・システムについての文書を参照している (坂口 2016: 277)。また、Yates の Control through Communication を参照している点でも、本研究にとって重要な先行研究である (坂口 2016: 32)。
  - 4) ここでアンダーソンがインドネシア、タイ、フィリピンの地域研究者であったことを想起すべきである。アンダーソンにとってナショナリズムは、第一に、インドネシアのそれであった。そして植民地において生じたナショナリズムの先行者として、18 世紀の南北アメリカのクレオール・ナショナリズムがある。次の一節には、ナショナリズムと出版語の結びつきの多義性が如実にしめされている。「[植民地ナショナリズムにおいて] インテリゲンチアが前衛的役割を果たすようになったのは、かれらの二重言語読み書き能力、あるいはむしろ、かれらの読み書き能力と二重言語能力によったということも一般的に認められている。出版物を読みまた書くこと、これによって、すでに述べたように、想像の共同体は均質で空虚な時間の中を漂っていくことが可能となったのだった。二つの言語を使いこなすということは、すなわち、ヨーロッパ国家語を経由して、もっとも広い意味での近代西欧文化、とくに十九世紀に世界の他の地域で生み出されたナショナリズム、国民、国民国家のモデルを手に入れることができるということであった」(Anderson 1991=1997: 192)。このような植民地のナショナリズムの範例として、プラムディヤ・アナンタ・トゥールの『ブル島四部作』を考察することができる (新倉 2016)。
  - 5) この文章のうちに、1950 年に出版された『国字問題論集』に収録される。この論集の戦後の出版が示すように、国字問題は戦後にも継続していた。また、1948 年には平井昌夫が『国語国字問題の歴史』を執筆している。これは、1998 年に安田敏朗の解説を付して三元社から復刻されている。
  - 6) 梅棹は、1954 年に「第二標準語論」という文章を著している。1987 年に世界の日本語学習者の増大をうけて日本語国際センターを設立する国際交流基金とも関わり、1979 年には「国際交流と日本語」、1986 年には「世界のなかの日本語」という文章を著わしている。それぞれ『あすの日本語のために』と『日本語と日本文明』という著書にまとめられ、『日本語と事務革命』とともに、梅棹忠夫著作集の第 18 巻に、「日本語論の三部作」としておさめられている。
  - 7) Yates (1989)。イエイツの議論については、新倉 (2022) を参照。
  - 8) 岩村 (1953) の著者紹介では、次のように書かれている。「明治 42 年海軍兵学校卒業。イギリス在勤大使館付武官補佐官。ロンドン会議全権随員、

海軍省首席副官、扶桑艦長。艦政本部長官。支那方面、ジャバ方面艦隊司令長官を経、現任事務能率協会会長および能率事務機株式会社社長。岩村は、戦前の1928年に海軍中佐として『有終』という雑誌に「日本海軍」という文章を寄稿している。また戦後の文章では、しばしば、加藤周一の叔父としても紹介されている。

- 9) Robertson (2021); Vismann (2008); Gitelman (2014)。メディア論としてのギテルマンの議論については、新倉 (2024) を参照。
- 10) トーマス・マラニーの『チャイニーズ・タイプライター』の議論は、ポストコロニアリズム研究の知見と事務の問題を結びつけた研究として考えることができるであろう (Mullaney 2017=2021)。
- 11) 「同時代に生活する同一国民が同一の「国語」を話すこと。同一の「国語」は「標準語」と称され、往々にしてその使用が強制的に求められる。その際の「標準語」は、政治・経済・文化の中心の言語が軸となる。政治学者ベネディクト・アンダーソンは国民国家の統治システム（「ファイル、関係書類、公文書、法律、財務記録、人口統計、地図、条約、通信、覚書その他」）を比喩的に「配電システム」と称した。ここにあげられた「配電システム」の例は、基本的に書きことばで成り立っていることに注目したい」(安田 2006: 44)。
- 12) アン・ブレアらが編集した「情報」についての大著は、書物の歴史学と同時に、植民地研究の成果をふまえながら、「情報」を書字やドキュメントなどのさまざまなモノや実践の総体として定位している (Blair et al. eds. 2021)。

## 文献

- Anderson, Benedict, [1983], 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (=1997, 白石さや・白石隆訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。)
- Blair, Ann, Paul Duguid, Anja-Silvia Goeing, and Anthony Grafton eds., 2021, *Information: A Historical Companion*, Princeton University Press.
- Gellner, Ernest., 1983, *Nations And Nationalism*, Blackwell. (=2000, 加藤節訳『民族とナショナリズム』岩波書店。)
- Gitelman, Lisa, 2014, *Paper Knowledge: Toward a Media History of Documents*, Duke University Press.
- 平井昌夫, [1948] 1998, 『國語國字問題の歴史』三元社。
- イ・ヨンスク, 1996, 『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波書店。
- 岩村清一, 1946, 「国家事務能率増進の具体案」『ダイヤモンド』34(30): 20-22.
- , 1953, 『日本とイギリスの民主政治』河出書房。
- , 1955, 『日本生産性の基盤』河出書房。

- , 1956, 『第二次産業革命と国字問題』 一橋書房.
- 紀田順一郎, 2001, 『日本語大博物館——悪魔の文字と闘った人々』 筑摩書房.
- 駒込武, 1996, 『植民地帝国日本の文化統合』 岩波書店.
- 小森陽一, 2000, 『日本語の近代』 岩波書店.
- McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making or Typographic Man*, University of Toronto Press. (=1986, 森常治訳『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』 みすず書房.)
- Mullaney, Thomas S., 2017, *The Chinese Typewriter: A History*, MIT Press. (比護 遥訳, 2021, 『チャイニーズ・タイプライター——漢字と技術の近代史』 中央公論新社.)
- 西川長夫・渡辺公三編, 1999, 『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』 柏書房.
- 新倉貴仁, 2016, 「「想像の共同体」を越えて」『思想』 1108: 42-62.
- , 2022, 「現代ナショナリズム研究のための理論的視座——メディア技術の変容に注目して」『コミュニケーション紀要』 33, 21-33.
- , 2023a, 「事務機械の歴史社会学的研究に向けて——Yates, JoAnne の *Control through Communication: The Rise of System in American Management* をめぐって」『コミュニケーション紀要』 34: 39-53.
- , 2023b, 「国民の標準化——総力戦体制とナショナリティの構築をめぐって」『年報社会学論集』 36: 76-87.
- , 2024, 「プロトコルと書き込み——Lisa Gitelman のメディア研究をめぐって」『メディア研究』 104: 165-183.
- 長志珠絵, 1998, 『近代日本と国語ナショナリズム』 吉川弘文館.
- Robertson, Craig, 2021, *The Filing Cabinet: A Vertical History of Information*, University of Minnesota Press.
- 酒井直樹, [1996] 2015, 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』 新曜社.
- 坂口貴弘, 2016, 『アーカイブズと文書管理——米国型記録管理システムの形成と日本』 勉誠出版.
- 澤柳政太郎, [1904] 1950, 「国民の一大問題」吉田澄夫・井之口有一共編『国字問題論集 下』 富山房, 197-213.
- Smith, Anthony, D., 1991, *National Identity*, University of Nevada Press. (=1998, 高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』 晶文社.)
- 梅棹忠夫, 1969, 『知的生産の技術』 岩波書店.
- , 1992, 『梅棹忠夫著作集 第18巻』 中央公論社.
- , 2015, 『日本語と事務革命』 講談社.
- Vismann, Cornelia, 2008, *Files: Law and Media Technology*, Stanford University Press.

- 渡邊佳子, 2021, 『近代日本の統治機構とアーカイブズ——文書管理の変遷を踏まえて』 樹書房.
- 安田敏朗, 1997, 『帝国日本の言語編制』 世織書房.
- , 2006, 『「国語」の近代史——帝国日本の国語学者たち』 中央公論新社.
- , 2016, 『漢字廃止の思想史』 平凡社.
- Yates, JoAnne, 1989, *Control Through Communication: The Rise of System in American Management*, Johns Hopkins University Press.
- 吉田澄夫・井之口有一共編, 1950, 『国字問題論集』 富山房.